

	方剂名	効能	生薬組成
	書籍	主治および証	病機 方意
治風剂 平熄内風剂 11			
	とうきいんし 当帰飲子	滋陰養血・祛風止痒	当帰・白芍・川芎・生地黄・白蒺藜・防風・荆芥穂各6g・何首烏・黄耆・炙甘草各3g 生姜と水煎し服用する。粉末にし1回12gを生姜と水煎し服用してもよい。
	濟生方	<主治> 血燥生風 皮膚痒痒、皮膚の乾燥、細小の落屑や紅色丘疹、舌質が淡、脈は細などを呈す。 <病機> 老化、慢性病、その他により陰血が暗耗し、営血による濡潤ができないために肌膚に失養乾燥が生じ、虚に乗じて外風が侵入し、陰血不足による内風と結びついて皮膚病変を生じる。 肌膚失養乾燥のために皮膚が乾燥して萎縮し、搔くと細小の落屑がみられる。内風、外風が結びついて肌膚を犯すので、痒痒が出没、遊走し、風邪が鬱すると軽度に化熱して紅色丘疹を呈することもある。営血の衰少により衛気も不足するために邪を駆逐できず、また内風も引き続き発生するので、病変は慢性の経過をとり治癒しがたい。 <方意> 滋陰養血を主体に祛風止痒を加える。 滋陰養血の当帰・白芍・生地黄・何首烏は、肝血を滋補して柔肝熄風する。活血の川芎は、血虚で渋滞した血行を促すと共に、肝の疏泄を舒暢して内風の発生を防止する。白蒺藜は疏肝、平肝熄風に働くと同時に、祛風の効能をもっており、祛風止痒の防風・荆芥と共同し、内、外の風邪を除いて痒痒を止める。黄耆・甘草は、「気よく血を生ず」の効果をあげ、衛気を充盈させて祛邪の力を高める。炙甘草は白芍と共に酸甘化陰にも働く。 <参考> 本方（当帰飲子）は、血燥生風に対する代表方剂で、熱証が甚だしくない場合に適する。 血熱に対する生地黄と、風熱に対する白蒺藜の配合があるのみであり、風熱が盛んな場合には適さない。 風邪が鬱して軽度の化熱がみられる場合によい。 本方（当帰飲子）は滋陰養血と、熄風の配合でもあり、血虚生風のふらつき、めまい、しびれなどにも用いてもよい。 日本での保険適応効能、効果 冷え症のもの次の諸症；慢性湿疹（分泌物の少ないもの）、かゆみ	